

テーマ

組合事業による新たな展開

難病患者の「コミュニケーションを支える意思伝達装置 「話想（はなそう）」の開発

企業組合 S・R・D

研究機関等との共同研究を通じて、意思伝達装置に関心の高い団体・企業、患者との情報交換・交流を図ることができ、それらの出会いが代理店組織による販売事業に結びついている。

背景と目的

当組合では、医療機関や自動車部品卸売商のシステム開発を請け負ってきたが、群馬県難病相談支援センターの「電子相談票システム」を開発したことがきっかけで、平成20年に群馬大学大学院医学系研究科より意思伝達装置開発の相談があり、共同研究を開始した。

事業・活動の内容

当初は意思伝達だけを目的とした簡単な装置を作成する予定であった。しかし、今まで難病患者と接する機会がなかったため、既

存の機器は一般的なコミュニケーションの感覚から遠いものに映った。そのため、より患者のコミュニケーションの充実に重点を置き、かつ介助者の負担も軽減できる意思伝達装置の開発を目指し、研究に取り組んだ。

平成22年には、日本難病医療ネットワーク研究会、全国難病センター研究会などで意思伝達装置の研究について成果を発表した。その後、平成24年9月に意思伝達装置「話想（はなそう）」が完成し、患者向けモニターテスト後、群馬県で販売を開始した。平成25年4月からは、研究会で出会った企業が代理店を組織し、全国展開を図ることができた。「話想」は補助具の認定を受けており、利用者には国の補助が出るため、経済的な負担は非常に軽微で済む。

また、従来の意思伝達装置は、病気の進行度合いに応じて機器を

変える必要があったが、「話想」は1台で対応できる点で優位性がある。エアコン、照明などのリモコン機能やインターネット、メール、ウェブカメラなどの様々な機能が1台備わっている。その上、本体はタブレットであるため、外出する際も携帯することができると点で利便性も高い。

意思伝達装置は、利用者にとって唯一のコミュニケーション手段であり、生活に欠かせないものである。一人でも多くの方に喜ばれることを目指し、今後は「視線入力」「ナースコール」「多言語化」「知的障害児の学習」への対応を目標に開発を継続していく。

活動の成果

「話想」は現在までに約70台を販売し、現在も患者からの問い合わせが増え続けている。平成26年には「群馬県ビジネスプランコン

テスト」最優秀賞を受賞し、平成27年4月に経営革新計画の承認を受けるなど、社会的評価の高い事業としても認められている。



▲意思伝達装置「話想（はなそう）」

企業組合 S・R・D

住 所：〒371-0017 群馬県前橋市
日吉町四丁目32番地12

設 立：平成15年2月

出資金：600千円

電 話：027-234-2607

URL：

<http://www.maroon.dti.ne.jp/hanasou/>

業 種：情報サービス業

組合員：4人